

服がくれる福

3年2組38番 伊藤美雨

3期生 中濱友香

3期生 南野乃衣瑠

Keyword: 「ファストファッション」「環境問題」「北欧」「再利用」

1. はじめに

私はファストファッションの労働問題と環境問題に目を向け、約5年間探究活動を進めてきた。人が生きていくのに不可欠な衣服が生産、消費の過程で人や環境に悪影響を与えているという問題を自分ごとに捉え、問題解決への企業の取り組みや私達にできることは何かを探した際に、まずは自分の活動を校内へ発信することが必要だと考えた。

2. 序論

ファストファッションとは、「流行の最先端をいち早く取り入れた、低価格で、ほどよい品質」のファッションを言う。例を挙げると、GU、ZARA、GAPなど皆さんの身近にあるブランドはファストファッションである場合が多い。そんな便利で高品質のファストファッションだが、今世界的に労働問題や環境への影響が問題視されている。

初めに、労働問題では主に低賃金・長時間労働・劣悪な労働環境の三つが挙げられる。長時間働いても一部の国では、最低賃金すら支払われていないことや、残業代が支払われないこともある。そのため、労働者たちは労働に見合った報酬が得られず、搾取的な労働条件が常態化している。また、大量の商品を生産するため、多くの労働者が長時間労働を強いられている。1日12時間以上働くこともあり、労働者たちの健康にも悪影響を与えている。さらに、児童労働や強制労働などの人権侵害も問題視されており、ファッション産業は、これらの倫理的な問題にも責任を持って対処・改善していく必要がある。製造工場では、安全で健康的な労働環境が確保されていないことがあり、工場の安全基準が不十分な場所や、労働者たちに適切な保護装備が与えられていない場合があるため、労働者たちは、重大な労働災害や健康被害を被ることがある。実際に、2013年4月にバングラデシュでラナ・プラザ崩落事故が起こっている。このビルは正規の許可手続きなしに建築され、5～8階部分は違法に建て増しされており、ビルの使用を中止するように警告がされていたが、ビルのオーナーらが警告を無視し崩落した。4基の大型発電機の振動と数千台のミシンの振動が崩壊を誘発したという。

環境問題では、水質汚染、大気汚染、大量の廃棄物が挙げられる。洋服を製造するためには大量の水が必要とされ、世界の工業用水汚染の20%は、繊維の染色と処理に起因している。製造時にかかる環境負荷だけでなく、私たちが洋服を洗濯するときにも、マイクロファイバーやマイクロプラスチックが海洋に流出している。化学繊維の製造には、大量の化学薬品や有害物質を使用する。これらの物質が大気中に放出されると、大気汚染の原因になる。石油由来の合成繊維を材料とした製品製造にかかる温室効果ガス排出量は、合計12億トンのCO2に相当し、これは世界の国際航空業界と海運業界を足したものよりも多い量だ。環境省の調査によると、年間で一人当たり約12枚の衣服が捨てられており、さらに一回も着られていない服が一人あたり25着もあるといわれている。現在、捨てられた洋服の95%はそのまま焼却・埋め立て処分されている。その量は年間で約48万トンに上り、この数値を具体的に換算すると、大型トラック約130台分を毎日焼却・埋め立てするのと同等の量である。このような問題に企業は様々な取り組みを行っている。ZARAはブランドや状態を問わない衣料品などを回収し、分別して非営利団体に支援している。他にも、ユニクロでは不要になった自社ブランドの製品を世界各国の店舗で回収し再利用する「全商品リサイクル活動」を実現している。

3. 本論

・活動結果

(1)服福プロジェクト

安価なファストファッションが主流になっている背景に存在する問題の認知度をあげることで、消費者に問題を意識して衣類を購入してもらえ考えた。まずは身近な消費者である校内の生徒に認知してもらうために、捨てる服をリサイクル・リユースする方法や問題について広めるプロジェクトを行なった(図1)。

このプロジェクトは、不要になった服をリメイクしてティッシュケースを作るという私たち独自の企画だ。楽しくファストファッションを知ってもらうという事を目的とし、本校の中学1年生～高校3年生の全生徒にポスターで参加者を募った。参加した約10名にファストファッションの簡単な説明をした後、ティッシュケースを作成した。事前に自分達で裁断しておいた生地を使って参加者に木工用ボンドを使って作成してもらった。



図1 服福プロジェクト

(2)参加者アンケートの結果

ティッシュケース作成後に行ったアンケートでは、多くの参加者が「安さの裏に労働問題があることを知り、ファストファッションへの印象が変わった」と答えた。また、「服の買いすぎを控えようと思った」「不要な服を再利用する大切さを感じた」など、日常の行動を見直すきっかけになったという意見も多く見られた。

・考察

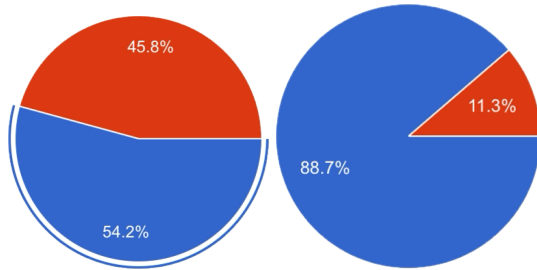
このプロジェクトを始める前は調べ学習ばかりだったが、イベントを実施した事で他の人の意見を取り入れられ新しい考えの発見や、自分達の活動を広められた実感を得る事ができた。ファストファッションの問題の認知度は低くなかったが深刻さは認識されていなかった。アンケートの結果で、解決するためにどのような事をすれば良いか考えさせられたという意見が多かった事から実際に行動に移すことはハードルが高いことがわかった。

(2)デンマーク、日本でのアンケート

私はデンマークの留学でサステナブルな行動が組み込まれた生活を体験した。デンマークのセカンドハンドショップには買取という仕組みがなく、販売品は人々が使わなくなったものをショップに寄付するという形で成り立っている。自分が廃棄する予定のものは他の誰かには必要かもしれないという「物を簡単に捨てない文化」が根強く存在していると感じた。他にも、フェアトレード商品の購入率の高さや、気候変動に対する意識を高めるねらいのある大人の肩の高さに脚が引き上げられたベンチの設置など、日本と比較して、持続可能な社会への取り組みが生活に溶け込んでいる。そういった慣習のあるデンマークと日本で、問題の認知度や消費スタイルの違いを知するために、日本人の学生59人・デンマークの学生53人にアンケートを行った。

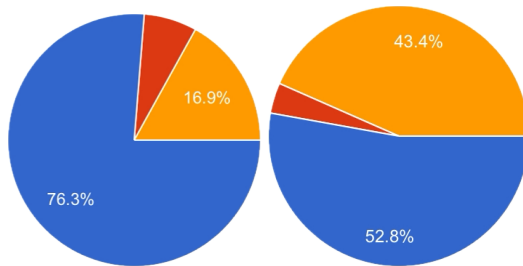
数ある質問の中でも顕著に違いが出た質問が二つある。それは、①リサイクルショップで服を購入したことがあるか、②リサイクルショップとファストファッションブランドのどちらを多く利用するかという質問だ。

①右:日本 左:デンマーク 青:はい 赤:いいえ



デンマークの学生は「はい」と答えた人が約9割なのに対して日本の学生は約5割だ。

②右:日本 左:デンマーク
青:ファストファッション 赤:リサイクルショップ 橙:五分五分



どちらもファストファッションのみの購入者が最も多いが、ファストファッションとリサイクルショップを同じ頻度で利用している割合が日本では約16%なのに対してデンマークでは約40%にのぼる。

・考察

このアンケートからデンマークの学生のリサイクルショップの利用率は日本の学生より高い。また、このアンケート内の「ファストファッションに付随する問題について知っているか」という質問でも「はい」と回答したデンマークの学生が日本の学生より約2割多かった。このことから、日本と比較して日常的に問題に対して意識を向ける機会が多く、実際に行動に移す環境があると考えられる。

4. 結論

この探究を通して、ファストファッションの労働・環境問題の解決には、企業の取り組みだけでなく、日常的に消費者にサステナブル行動を促す社会的な仕組みが必要であると明らかになった。デンマークで見られたような、日常的に持続可能性を意識させる文化や制度は、個人の意識を自然に変化させることが必要だと考える。日本でも、購買やリユースなどの行動を可視化・共有できる仕組みやアプリを幅広い世代をターゲットにして政策することで、持続可能な選択を習慣化できる。私は、日常の中で持続可能性を意識する行動を促すことが、国際的課題の長期的解決や開発途上国支援につながると考える。

5. 参考文献・出典

環境省 これからのファッションを持続可能に

https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/index.html, (2023-11-07)

ユニクロ RE.UNIQLO

https://www.uniqlo.com/jp/ja/contents/sustainability/planet/clothes_recycling/re-uniqlo/,
(2023-11-07)

ZARA 衣類寄付

<https://www.zara.com/jp/ja/sustainability-collection-program-mkt1452.html>, (2023-11-07)